

まちやむら、そこに住む人びと(=ざいち)の、  
知恵や生き方(=ち)から学び、実践する活動です。



京都大学  
生存基盤科学研究ユニット  
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・  
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」

大津市比良山系の冠雪

## 朽木フィールドステーション

### カヤダイラの再生とカヤバシの活用

朽木 FS 今北哲也

我々「火野山ひろば」の活動も数年余り経ち、火入れ跡に草や低木が広がり始めている。焼畑による初年度の紅カブづくりの後、二年目、三年目に向かう作り回しはどのようにすればよいのだろうか。

昨年(2012)は、椋川(湖西・高島市今津町)で萱原を春焼きし、中河内(湖北・長浜市余呉町)でも萱原を夏焼きする機会を得た。本ニューズレターでは、萱原をそれぞれ春と秋に火入れするという二箇所での取り組み内容を述べ、冒頭に掲げた課題についてカヤに注目して考えてみたい。

#### 二つの萱原

屋根葺き、雪垣、田畑の刈り敷き等を得るための萱原は椋川ではカヤダイラとよばれ、春に火入れした。火を入れると質の良い揃ったカヤが採れるとされる。椋川の現場は元は林道開削残土を埋め立てた原野である。2008年秋と翌春に堆肥を入れ、カヤ株を移植した<sup>註1)</sup>。徐々にカヤ株が広がり、昨春屋根材のカヤ収穫を目指し一部だが初めて火を入れた(写真1)。ところが秋になっても火入れした範囲だけ穂が出ないという異様な光景に遭遇した。穂が無いカヤに価値はなく、火入れ区、火入れしない区、さらに遊休農地(田んぼ)、三箇所のカヤの質や収量の比較検証を目論んでいたが叶わなかった。



写真1. 椋川 カヤ造成地の火入れ  
(撮影 黒田)

一方、中河内(湖北・長浜市余呉町)では低木の山に加え新たに萱原が焼畑地に加わった。聞き取りでは、カヤが繁茂するのは山だけであり<sup>註2)</sup> 地元ではカヤバ(ヤシと呼んで大事にした。カヤバシでは火を入れてカブや野菜を作った。養蚕が流行った時代にはクワ畑にもなった。カヤバシ→焼畑(山カブや自家用作物)→クワ(商品作物)の作り回しである。それでも、カヤバシは昔は屋根葺き材としての価値が大きかったという。

昨夏、炎天下にカヤを刈り払い火を入れ、紅カブと大根を播いた。カヤバシの焼畑利用では播種前にカヤ株を起すのが習わしであった。私達は、現場が急斜面なため土壌流亡を恐れ、また力量を超える作業量をおもい、

鋤起こしせずにカヤ株の間の焼け地に播種した。カブや大根の収穫頃にはカヤは再生し2~3尺の丈に、ヨモギなども1尺前後に再生した。カヤや野草が春の山菜シーズンのように萌芽する光景は中之郷(余呉町)のスキー場草地での火入れで経験してきたことでもある<sup>註3)</sup>。

#### カヤの再生と焼畑の作り直し

椋川で穂が出なかった理由は、火を入れなかった萱原には穂が出ていた事実から推して、火入れのタイミングが原因ではないかと先ず考えられた。昨春は、火入れ作業が4月下旬にずれ込み、カヤ株の中からあおい新芽がのぞいていた。火による生長点のダメージを過小評価した結果、生育が遅れ出穂に影響したのではないか。確認のため、今春は新芽がのぞいた対照区を小面積設け、火を入れ秋の出穂まで追跡したい。

最後に、中河内のカヤバシにおける焼畑からカヤ収穫への作り回しのあり方を提案する。カヤ株を起こさないままの焼畑跡は春からカヤが生茂る。カヤとその株間に再生したヨモギを養生、空いた地にエゴマ、アズキを作る。焼畑利用、カヤ、野草採取が混在する2年目である。ヨモギ以外の野草は除草する。3年目は春焼き区と焼かない休閑区をつくり、植生の変化、カヤの生育を確かめる。4年目は全域休閑し、5年目に春焼きする。萱原の休閑は地域により1年、2年、3年など慣行の違いが見られるが、以上の実践を通じて中河内での休閑期間とカヤの質や量との関連を確かめる機会にしたい。また、私たちが火入れしたカヤバシは嘗て地元でカブの焼畑利用が行われ、放棄されてから



写真2. 中河内 カヤバシの遷移  
萱原と木山 (撮影 増田)

も木山に移行せずカヤバシのまま今日に至っている。南隣も嘗てカヤバシであったが、山裾の杉人工林を除けば雑木山に遷移している(写真2)。カヤバシの履歴を持つ隣接地が異なる遷移を見せる事実から、私たちが取り組む「くらしの森」の同一地域での多様な姿が想像される。

註1) ざいちのち中間報告書 ニューズレターNo.4 「くらしの森」の  
一歩 P100 2009・3

註2) 現在は集落から遠い遊休農地にカヤが生えている。農地が全て耕作されていた時代には川土手に至るまで人の手が入り野草の利用が徹底していた。カヤは山に生やして管理するもの、とされた。

註3) ざいちのち中間報告書 草地に注目して P31 2009・3

## 亀岡の農業と自然（7）

### ～ひっそりと暮らす生きものたち～

京都学園大学 大西信弘

亀岡に来るようになるまで、トビ（写真1）以外のワシやタカ（ワシタカ科の鳥類）を、ほとんど見ることはありませんでした。ワシやタカは、少ないから見ることは難しいのだろうと、考えもなしに思い込んでいました。実際、そう思っている方も多いのではないのでしょうか。

クルベジ農業体験塾をやっている保津町周辺ではオオタカ（写真2）はよくみることができます。保津川沿いには、魚を主なエサとし、魚捕りの好きなミサゴ（写真3）が飛んでいることがあります。また、この季節、冬鳥として渡ってくるノスリ（写真4）が河川敷の草地や農地でホバリングしながらエサを探しているのを見かけます。この他にも京都学園大学の裏山でハチクマが何者かに襲われて羽が散らばっていたこともあります。ただ、見れるといっても、毎日、何羽も見ることがある訳でもないので、やっぱり数が少なくて見るのが難しいともいえるでしょう。

しかしその一方で、ワシ・タカを見るようになってからは、見かける機会が増えているようです。確かに数が少ないことも理由の一つではあるのですが、気づかずにいたり、見過ごしていたりというのも、大きな要因だったのだと思います。生き物を観察するときには、自分が見たいと思ったものしか見ることが出来ないと言われるかもしれませんが、そのことを再認識した出来事です。

ワシ・タカのファンには、よく知られているのですが、サシバ（写真5）やハチクマ（写真6）は、春と秋に大規模な渡りをします。飛ぶときは、一日に千羽以上も一カ所を通過します。私も琵琶湖の近くで何度か見たことがあります。人知れずそれだけのワシタカ類が渡っているとは、驚きです。亀岡上空でも、ハチクマやノスリが渡るのを見ることがあります。

こうしたワシタカ類が生息するからには、それらのエサとなる生物が豊富に生息しているからだと考え、様々な生き物達が、人に知られずひっそりといろんなところに暮らしているといえるのではないのでしょうか。こうした生き物達がひっそりといたくならないことを祈るばかりです。



写真1 トビ。よく見れば立派なワシタカではないでしょうか。京都学園大学近くの農地で2008.10.18撮影。



写真2 札の森で獲物を捕らえたオオタカ。2007.1.24撮影。



写真3 ミサゴ。沖縄漫湖で2008.3.29撮影。



写真4 ノスリ。京都学園大学近くの農地で2009.1.27撮影。



写真5 サシバ。渡りの季節に宇治市で2011.9.25撮影。



写真6 ハチクマ。渡りの季節に宇治市で2010.9.25撮影。

## 機械化以前のコメ作り：カドボシ

守山FS 研究員 藤井美穂

滋賀県守山市洲本町開発（かいほつ）集落で生まれ育ったA氏（男性 1926年生）から稲作について聞き書きを行っている。今回は稲の脱穀と稲の乾燥を記した（本ニューズレター no.46 参照）。今回は、10月初旬に行われたカドボシについて述べてみたい。

カドボシとはモミを天日で乾燥することであり、モミ干しとも言う。カドとは、屋敷地の中の畑のことである<sup>1</sup>。開発集落の屋敷地は南または東に畑があり、カドボシをするために使った。その畑にはカドボシの時期に収穫できるナスビ、キュウリ、ダイコン、カブラ、ミズナを栽培した。カドをしまえたら（終わったら）、外畑（そとばた）のナタネの苗をカドに本植えにした。

お日さん照ってはるのに、カドを遊ばしておくのもったいない。カドをあかさんように仕事をするんやな。（A氏）

夕方、田で脱穀したモミはヒゲナシに入れて大八車で家に運び、翌日、朝から天気であればカドでムシロを広げて乾燥させた<sup>2</sup>。雨の日は小屋のひさしの下にモミを積んでおいた。朝、雨があがって天気になった場合、カドに水が溜まっているとスキでキメ（土に入れる切れ目）をつけてその水を地中に入れた。「スキを抜くとキメが水を吸いよる」（A氏）。水がひくと地面に長ワラを撒き、その上にス<sup>3</sup>を敷いた。

朝、子供はスの上にムシロを約100枚敷いてから小学

校に通った。ワラで編んだスの大きさはムシロ4枚分であった<sup>3</sup>。各々のムシロの真ん中に箕（み、写真1）を使ってモミを均等に置いていくことを「モミモリ」と言う。次に、モミサガシ（モミならし、写真2）でモミを縦方向に前後1回ずつ均してムシロいっぱいモミを広げる。

モミサガシの歯の型にそうて（そって）平らになったモミに筋がついて山と谷になるやろ。これは、モミが平らになったときよりも、よう（たくさん）日が当たるところが倍になるということや。裏表ができるけどな。よう考えてるやろ。（A氏）

昼食後には「モミがえし」と言って、モミが広げられたムシロの両端をもってモミを真ん中に寄せる作業をした。そして、モミサガシで再びモミを広げて干した。3時頃、モミがえしをしてから、「モミの日光のぬくみがさめないうちに」ムシロの真ん中にモミをよせる。ムシロの左側を二重に折ってモミにかぶせ、更に右側をそのムシロの上にかぶせる。筒状になったムシロの両端を持って、小屋のひさしの下に運ぶ。これを「モミトイレ」と言う。そのムシロが重ならないように互い違いに5段に積んでいく。雨が降ってくると、積んだムシロにスを立てかけて、モミの熱を覚めにくくした。このようにして、カドボシは3日間行われて、モミを乾燥させた。その後、ヒゲナシにモミを入れて小屋の中に置いた。

今回はモミの選別から精米にするまでの過程を報告する。

- 1：屋敷地の外にある畑は外畑（そとばた）と言う。
- 2：ヒゲナシについては本ニューズレター no.43 を参照。
- 3：スはワラの株と穂先を互い違いにして編んだものである。その大きさは、縦3尺（約90cm）、横24尺（約7.6m）、ムシロ1枚の大きさは縦3尺（約90cm）、横6尺（約180cm）である。



写真1. 箕



写真2. モミサガシ（モミならし）

## マニンジャウ湖の起源

総合地球環境学研究所 アミ・A・ムティア

滋賀県では、以前は、おじいちゃんやおばあちゃんから琵琶湖についての民話が伝えられていました。琵琶湖はよく研究されており、現在、琵琶湖博物館で、琵琶湖の自然や歴史やその起源について、古い文書や記録された昔話、あるいは地質研究などを誰でも読んだり見たりすることができます。でも、もも太郎や浦島太郎などの昔話と違って、琵琶湖の昔話は今ではこの地方でもあまり語られなくなってしまいました。一方、インドネシアでは自然現象や歴史、あるいは起源についてあまり学問的な研究が行われていないのですが、昔話や伝説は広く人々の間で語り継がれています。また、人々の間の伝承の多くは信じられ、事実と民話や日常的な教えが混合しています。これは、子供から大人まで同じです。今回は、西スマトラに位置するマニンジャウ湖の起源について語り継がれてきた民話をご紹介します。

以下の民話は、マニンジャウ湖のバユア村在住のアドラミ氏から聞いた話です。実際はその民話には沢山のバリエーションがあります。ただし、主人公や場所の名前は変わりません。一般的なインドネシアの民族グループと同様、情報を口承するミナンカバウ人もやはり主人公と場所の名前は大切に保存しています。

昔々、西スマトラのある村に10人兄弟が住んでいました。そのうちの9人は男性なので、Bujang Sambilan（ブジャンサンビラン、9人の若者の意味）と呼ばれます。一方、一番下は女性でSiti Rasaniという名でサニと呼ばれていました。彼らはすべて孤児でした。それにもかかわらずミナンカバウ人の慣習により、彼らの“mamak”（おじ）が彼らの責任を持つことになっていました。ある日、彼らの“mamak”は自分の子供であるギラン（Giran）と一緒に彼らの家に来ました。そこでギランとサニが会いました。彼らは、一目で恋に落ちました。その後、ギランとサニはしばしば会い、そしてギランもサニへの愛を表現しました。

ある日、格闘技の大会が、村の集会所で開催されました。皆、それを見るために村の集会所に集まりました。最初は隣村の男とサニの兄、ククバン（Kukuban）の間の試合が始まりました。試合に皆興奮し、最後はククバンが勝ちました。次々の試合でもククバンは、強さを見せつけます。すべての挑戦者はククバンに負けました。最後にククバンはギランと戦うことになりました。彼らはともに有名な男達でした。しかし、数分後にククバンはギランから致命的な打撃を受けて、とうとうギランが勝ちました。ククバンは打撲を負った左足を引きずり、負けたことを認めざるを得ませんでした。

数ヶ月後、“mamak”とギランはサニに結婚を申し込むためにサニの家に来ました。サニの8人兄弟はみな賛成しましたが、ククバンだけ承知しませんでした。彼はギランに負けたため怒っていました。それで彼はサニの結婚に



写真. マニンジャウ湖

反対でした。それを聞いたサニは悲しくなり、その後、ギランとサニは川のそばで会うことにしました。川に行く途中、サニの足に棘が刺さり、ギランはそれを治療しました。

彼らは気付かなかったのですが、多くの人は以前から彼らの行動を見ていました。村民らは、彼らがまだ結婚していない人がやっではいけない事をやってしまったと思いました。村民らはすぐに村の会合を開き、ギランらを問い詰めました。そして悪魔を取り除くために、ギランとサニを、ティンジャウ山に追放しました。

沢山の人は、ギランとサニをティンジャウ山に連れてゆきました。そこでギランは、祈りました。「私達が誤っていたのなら、私たちの体は、このクレーターの中で燃えてしまうでしょう。もし私達に誤りがなければ、村の人々に災難が降りかかり、ブジャンサンビランは魚に変わります。神様、どうかこのお祈りを聞き入れてください。」その後ギランとサニは火口に飛び込みました。すべての村の人々は何が起こるか緊張しながら見ました。突然、火口のクレーターは激しく噴火を始めました。そこにいたすべての人々は助かりませんでした。ブジャンサンビランは瞬時に魚に変わりました。

ティンジャウ山の火口は、広いクレーターを残し、最後は湖になりました。これがマニンジャウ湖の起源です。周辺の住民達は、山の名前ティンジャウを湖の名前（マニンジャウ）に使いました。その意味は「見る」です。事件に関わった指導者の名前である Tanjung Sani, Sikudun, Bayua, Koto Malintang, Koto Kaciak, Sigalapuang, Balok, Kukuban, Sungai Batangなどは、マニンジャウ湖の周りの村の名前になりました。

この民話の中には、沢山の道徳的なメッセージとアドバイスが入っており、人々は日常生活でそれをまもらなければならないと考えています。自然の怒りを理解し、良い人に導かれ、日常的な問題も村の会合で解決しようとする、などから、住民たちはその民話を大変リアルに感じています。さらに、今でもある村の名前を使うことにより、人々はますますリアルに感じます。このように、伝説はミナンカバウ人や一般のインドネシアの人々にとってとても重要な意味を持っているのです。